



婦人生活

第十一卷第四號

外へ外へ

○春風が誘ひに来る。蝶々が迎ひに来る。若草は褥を布いて、花は美しき笑みをたへて、野も山も子どもの外遊を待ち設けて居る。花の香草の香をとり添へた、かぐはしく新らしい野の空氣と、萬人の浴するに任せて、與へて惜まない豊かなる日光と、皆之れ子ども爲に備へられた、大なる自然の恩恵ではないか。何者の無情漢ぞ、此の好季に於て尙ほ子どもの足に足枷せする。せめて此の好季にあたつて、その狭くるしい煉瓦塀の圍ると、究屈な保育室の机腰掛から、つとめて子どもを解放せざる。何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまい。その手をひいて丘へ上り、その裾をかくげて小川を渡り、野を馳せ廻りて花を摘み、磯をつたふて貝を拾ふ間に、そこに大きな保育の場所があるのではないか。

○廣い自由な遊び場と、新鮮な空氣と、充分な日光とを、子どもの身體の立場

のみから讚美するのは未だ足りない。吾人は寧ろ子ども精神の眞の發達の爲に、第一缺くべからざるものとして此の三つを要求する。わけても快活にして、清潔にして、温雅なる子ども性情の發達の爲に、何よりも無くてならぬものは此の三寶である。しかも都會の文明は、だん／＼に此の三寶を子どもから奪つて、都會幼兒の此點に於ける不幸は、日一日と其の度を加へてゆくのである。眞に子ども幸福を願ふものは、先づ此の不幸から我等の小さき友を救ふてやらなければならぬ。我等の幼稚園に於ける四時不斷の急務の一つも亦、常に此の點に存する。少くもその適切なる機會を捉ふることに於ては我等は決してウツカリして居てはならぬ。況して氣無精、足無精であつてはならぬ。

○幼兒をして充分に自然に接せしめよとは、フレーム先生以來、子どもとの侶の最も大切な標語の一つである。而して吾人は、之れと全く同じ意味の

事(こと)を少く言葉(ことば)を換へて再び警告(けいこ)し度(た)い。他(ほか)でもな(な)い。『子供(こども)をして充分(じゅうぶん)に四季(しき)を識(し)らしめよ、四季(しき)を樂(たの)ましめよ』といふ事(こと)である。季節(せき)々々(々々)に合(あ)はした保(ほ)育(いく)資料(しりょう)の撰(せん)擇(たく)は言(こと)はずもがな。春(はる)は春(はる)、秋(あき)は秋(あき)らしい『季(き)の享(じやう)樂(らく)』をもつと多く(おほく)子供(こども)に與(あ)へ度(た)いと思(おも)ふのである。之(これ)は何(なに)も詩人(しじん)がつた事(こと)をいふのではない。『季(き)の享(じやう)樂(らく)』といふ事(こと)は、少(すく)くも人(ひと)の心(こころ)を四時(よじ)に新(あらた)ならしむるに於(お)いて、最(もっと)も効(き)の多(おほ)いものである。而(しか)して其(その)素地(そち)を幼(お)兒(い)に於(お)いて養(やしな)ふの必要(ひつた)うがあると思(おも)ふのである。保(ほ)育(いく)年(ねん)限(げん)三(さん)年(ねん)として、一(いつ)つの季(き)節(せつ)を眞(まこと)に識(し)らしめ、眞(まこと)に樂(たの)ますべき機(き)會(かい)は、僅(わずか)に三(さん)度(た)である。一(いつ)度の春(はる)と雖(いえど)、春(はる)の一日(いちにち)と雖(いえど)、決(き)してゆるがせにしてはならぬ。況(いはん)や雨(あめ)が有(あ)り風(かぜ)が有(あ)る。憂(うれ)する子供(こども)を眞(まこと)に心配(しんぱい)なく外(と)へ連(つ)出(だ)し得(え)る日(ひ)は、一(いつ)春(はる)幾(いく)度(た)とあるものでない。其(その)か(か)げ(げ)がへ(へ)のない機(き)會(かい)を捉(と)ふるに於(お)いて、保(ほ)育(いく)豫(よ)定(てい)案(あん)の如(ごと)き少(すく)し位(ゐ)如何(いか)してもよいと思(おも)ふ。幼(お)兒(い)保(ほ)育(いく)はそんな究(きう)屈(くつ)な答(こた)えのものではない。(會(かい)館(くわん)誌(し)三(さん))